

## 天声人語

「なにつ、ピストルをすられた？」。黒澤明監督の1949年の映画「野良犬」は、そんなセリフから始まる。警視庁の若い刑事が、バスの中で何者かに拳銃を盗まれた。やがてその銃を使った強盗事件が起き始める▼銃と犯人を必死に追うのが、三船敏郎演じる刑事である。そのぎらぎらしたまなこは、まさに野良犬のようだ。拳銃の中にあつた実弾は7発。1発、2発……と使用され、残るは3発となった。これ以上犯行が続く前に逮捕できるか▼今回の実弾は5発だった。大阪府吹田市の交番前で警察官が刺され、拳銃を奪われた事件である。1発の銃声が付近にとどろいたらしい。それでも銃が殺傷に使われる事態は避けることができた。事件から丸1日、住宅地に近い山中で容疑者が逮捕された▼外出をやめ、雨戸を閉ざす。周辺の地域では眠れぬ夜を過ごした方も多かったろう。「子どもがまだ不安がっている。落ち着くまではなるべく一緒にいてあげたい」。容疑者が逮捕された後も、そう語る母親の声が本紙夕刊にあった▼市民を守るための身近な交番と、そこにある拳銃。しかし警官が襲われ、銃が奪われる事件が散見されるようになった。対策の一つがカギの外しにくい新型の拳銃入れだったが、吹田の交番ではまだ導入されていなかった。対応の遅さは、どこから来るのか▼黒澤の映画は、犯罪を描くとともに、動機の背景にある社会のひずみも描いている。今回の容疑者は何ゆえ警官に刃物を向けたのだろうか。